

その他の調査

1 左京三条一坊九坪の調査 (第269-8次)

個人住宅建設に伴う発掘調査。左京三条一坊九坪の北辺にあたる。調査区は南北3m、東西12m、基本層序は、上から表土、褐色砂質土、灰褐色砂質土、暗灰色粘質土(遺構検出面)。掘立柱建物2棟、溝2条等を確認した。SB7085は西廂付き掘立柱南北棟建物。北妻を検出。身舎は梁間2間、桁行2間以上、柱間7尺。SB7086は掘立柱

南北棟建物。南妻を検出。梁間2間、桁行2間以上、柱間は梁間7尺、桁行6尺。南東隅柱と南妻柱の柱根が³残存していた。SD7087は、上層(灰褐色砂質土)、下層(暗灰褐色粘性砂質土)に分かれる。調査区東側の南北溝は、他の遺構よりもかなり新しい。遺構の時期を特定できる遺物はないが、掘立柱建物2棟は、柱間が6、7尺で揃い、建物と坪の主軸線がほぼ合うことから、奈良時代のものと考えられる。(清野孝之/考古第3)

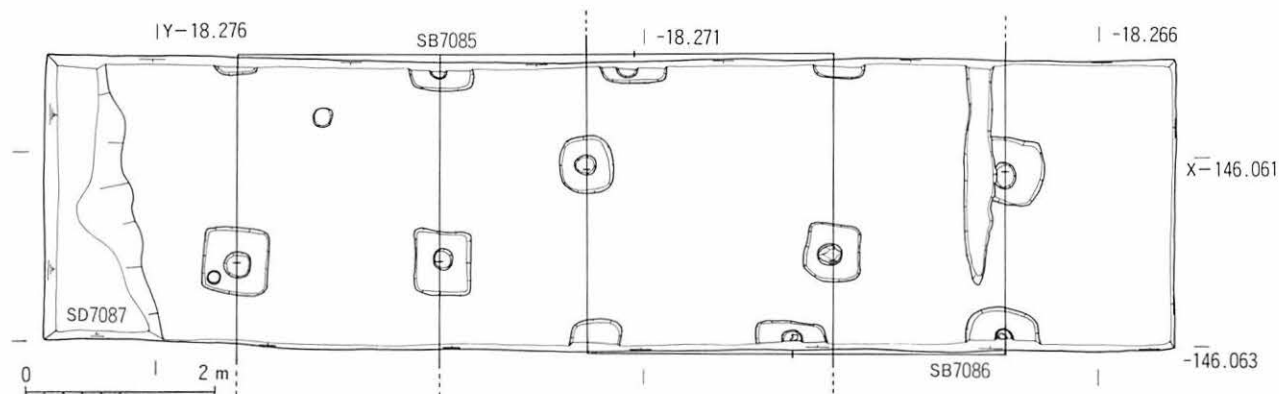


図53 269-8次調査遺構平面図

2 内裏北外郭北方地区の調査 (第269-9次)

専用住宅建築に伴う調査。調査地は内膳司と推定されている内裏北外郭地区の北方に位置する。調査区は南北8m、東西3m、基本的層序は、上から黒色土、黄色砂礫土、黄褐灰土、遺構面。素掘東西溝SD17605を検出した。深さ約1mで、幅約5.6mと推定される。溝の堆積は、上・中・下層に大別でき、平城宮V期を含む土器類が整理箱5箱分出土した。中層の明黄色粘質土層からは、藤原宮式の6273A、平城宮II期前半の6311Aa、6311Ba、6685B、6689A、II期後半の6308Aa、6663A、6694A、III期後半の6663Mなどを含む大量の瓦礫類が出土した。内膳司北を東西に走る宮内道路側溝の可能性もある。

(山下信一郎/史料)

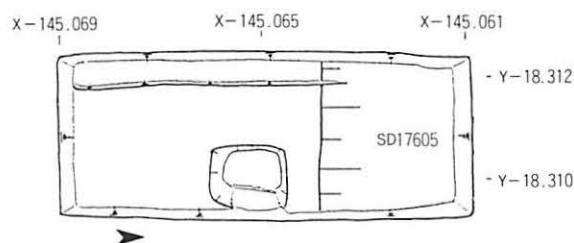


図54 第269-9次調査遺構平面図

3 その他の調査一覧

平城宮跡発掘調査部が96年度に実施した発掘調査で、
本巻に成果を掲載しなかったものを表12に示す。

調査次数	地 区	概 要
269-1	左京一条二坊十五坪	南北5m×東西15mを発掘、鉤の手状遺構1、溝3、小柱穴群1、石組、池状遺構1などを検出。(本文42～43頁を参照)
269-2	京北方遺跡	南北4m×東西3mを発掘、土坑1、溝1などを検出。いずれも新しい。
269-3	コナベ古墳南方、京北方遺跡	南北5m×東西4mを発掘、溝状遺構1を検出。
269-7	大膳職北方地区	南北4m×東西7mを発掘、顕著な遺構なし。
269-10	宮北方遺跡	南北4.5m×東西5mを発掘、土坑1を検出。
269-11	宮北方遺跡	南北2m×東西4mを発掘、地山を確認、顕著な遺構なし。
269-12	宮北方遺跡・市庭古墳	南北4.5m×東西4mを発掘、顕著な遺構なし。
269-14	市庭古墳(内裏北方)	南北9m×東西2mを発掘、奈良時代の整地層を確認、近・現代の土坑1基を検出。
269-15	市庭古墳	南北5m×東西3mを発掘、奈良時代の整地層を確認、土坑2を検出。
269-16	宮北方遺跡	南北5m×東西6mを発掘、地山を確認、顕著な遺構なし。
269-17	宮北方遺跡	南北3m×東西5mを発掘、土坑8基を検出、いずれも新しい。

表12 1996年度 その他の調査一覧表

平 城 専 こらむ 欄 ④

◆長屋王邸出土の墨画土器

裏表紙に載せた墨画土器は、左京三条二坊の一・二・七・八坪を占める長屋王邸のうち、七坪部分のA期の東外郭の東限の堀SA4520の外にある井戸、SE4366より出土した。長屋王邸の調査では、他にもSD5300出土の絵馬をはじめとして優れた絵画資料が出土したが、この資料は長屋王の存命期の邸宅内の遺構から出土したことから、王の暮らしの一端を示すものとして特に注目される。

墨画は土師器の皿Aに記したもので、土器の内外に墨画、墨書がある。外面には5匹の猿の墨画と、「船連縣麻呂」、「進」、「橋下」の文字を記し、筆ならしと思われる墨線もある。猿の墨画は、全身を描くものは1匹だけで、他は顔のみの表現である。この土器には焼成時についた黒斑があり、黒斑上に記した墨画、墨書は赤外線カメラで確認できる。内面には、枝葉、幹をもつ樹木と、犬の顔ともみれる墨画を描き、墨痕がある。猿の表現をみると、最初に目の部分だけを試し描きし、次に顔、最後に全身と、段階的に描写範

囲を広げていった過程が認められる。これまでに出土した墨画土器では、こうした過程を示すものはなく、表現も手ずさびて描いたような稚拙なものが多かった。しかし、この猿の描写や筆遣いは正確であり、専門の絵師が本格的な絵を描く前に下描きをしたものであろう。土器に記した「船連縣麻呂」は、絵師の名前であるのかもしれない。長屋王邸内では、木簡の記載から犬や鶴を飼っていたことが知られるが、

絵師がこの様に躍動的で、写実的な絵を描いていることから、実物の猿をモデルとして写生した可能性は高く、邸内ではおそらく猿も飼っていたのであろう。

土器に描いた動物の墨画で、鳥や馬はこれまで出土していたが、猿は初例である。天平宝字年間～平安時代に制作された、唐招提寺金堂の梵天像の台座の反花にも猿とみられる墨画があるが、今回の墨画はそれより30～40年古

い。日本における最古の猿の墨画であるとともに、法隆寺金堂の天井に描かれた動物の墨画との間をつなぐ資料として、美術史上でも重要な発見である。(T)